

二宮町山西の民俗（1）

佐川和裕

はじめに

大磯町郷土資料館では、例年、博物館実習生を受け入れている。これは博物館学芸員資格を取得するために必要な実習で、地域博物館の実情を学び、施設運営や学芸活動についての総括的な実務を学んでもらうことを目的としたものである。しかし、実質12日間の実習期間ではもちろんすべてを経験してもらうことはできないため、実習生からの要望もできるだけ取り入れながらカリキュラムを試行錯誤している。ただ、博物館に職を求めようと真摯に励んでいる実習生も少なくないが、即戦力として実際の現場で求められる技能とは残念ながら大きな開きを感じてしまうのが現状である。つまり、博物館学的な知識はもちろん必要だが、現場で要求されるのは、むしろ道具ひとつひとつの名称や使い方、土器や動植物の同定などの具体的な知識である。それらの知識やその調査技量などが欠けていけば十分とはいえない。

一方、博物館側の学芸専門分野の区分にも問題はある。当館のように考古、歴史、民俗、自然といった如何にも大まかな区分しかしていない博物館では、その範囲において担当を振り分けられていることが多い。場合によっては専攻分野とは全く別の分野を受け持たされることも少なくない。そのためには、何よりもフィールドワークによって経験的な知識や情報を得ていかなければならず、特にさまざまな場面で住民と直接かかわりを持つ現場では、文字通り住民から直接話しを聞く「聞き取り調査」こそ基本的かつ最も重要な作業といえる。しかし、大学の専攻分野に関係なく学芸員資格取得の機会が増えるにしたがって、調査経験を持つような学生が逆に少なくなっているのが現状である。その点は実習生自らも認識しているようで、例年、実習生の側から調査をしたいという要望が出されているため、ひとつの試みとして民俗の聞き取り調査を実施することにした。

ところで、今まで実習の中で聞き取り調査をやらなかったかというところでもない。当館では実習後半に常設展示室の一角を展示替するという実習をカリキュラムに課している。ささやかな面積ではあるが、実習生自らの企画から完成にいたるまでの作業は何よりも実践的で、大学も専攻分野も異なる実習生たちの共同作業は、思いがけない視点を期待できることがあり、実習生からの評判も良い。その際に展示資料の情報を得るため聞き取り調査をおこなったこともある。しかし、共同作業といっても各作業を分担しながら進めるため、調査を全員で経験するだけの時間的猶予はなかった。そこで今回はカリキュラムとして正式に組み

入れることにした。もっとも実習期間中に1日みの調査であるから、実習生にとっての教育的な効果はもちろん調査成果そのものも未知であった。したがって、さまざまなテーマで調査を行なっていくことを念頭におき、次年度以降の館務実習にも継続的に組み入れていこうと考えている。本報告を(1)としたのはそのためである。

また、実習生に対して聞き取り調査や民俗にかかわる予備知識を十分にレクチャーする時間がなかったため、今回は話者からの話を一方的に聞くにとどまった。その上で、適宜質問をしながら各自が興味をもった部分を調査票としてまとめ、あわせて後日レポートを提出してもらった。既に当館で刊行した『Report—大磯町郷土館だより—No15』においてその一部を報告している。なお、今回の報告は実習生からのレポートをもとに、筆者自身の調査票を補ってまとめたものである。

以上、調査を実施するにあたっての経緯を述べてきた。しかし、今まで述べたように館務実習生の教育効果を狙ってはいるものの、あくまでも最大の目的は民俗調査そのものにあることを最後に確認しておきたい。

【註】

- (1)平成8年度は、平成8年7月31日および9月3日～13日におこなった。詳しくは本誌年報(6頁)を参照願いたい。
- (2)今回の調査に参加した実習生は次の8名である。瀬木邦夫(東海大学工学部建築学科4年)・安井千栄子(立正大学文学部史学科4年)・桑島啓子(東京農業大学農学部農学科4年)・松本美樹(帝京大学文学部史学科4年)・宮代将男(駒澤大学文学部歴史学科3年)・大木佐和子(駒澤大学文学部歴史学科3年)・西田貴世美(専修大学文学部人文学科3年)・櫻田優子(トキワ松学園横浜美術短期大学造形美術科3年)

地域の概要

二宮町は相模湾に面した神奈川県ほぼ中央に位置している。調査対象の山西は町の南西部で、JR東海道線と国道1号線(旧東海道)が東西に貫いており、南面に相模湾を望んでいる。今でこそ海岸線から内陸部まで民家が密集しているが、かつては旧東海道筋に商家、農漁家が混在して集約されており、釜野などの内陸部では農業を生業としていた家々が散在していた。なお、昭和40年代初めに海岸線に沿って西湘バイパスが開通したため、景観上は浜と陸が断絶してしまっただが、現在でも地引網を中心とした漁業がおこなわれている。

『新編相模風土記稿』によれば、古くは川勾村と一区であり梅澤の里と呼ばれていたが、寛永年間に川勾村と梅澤村に二分されている。山西村としての初見は寛文の検地帳であるという。また、

小名として元梅澤、釜野、道場、越地があり、特に越地は東海道の立場（梅澤の立場）として茶店が軒を連ね、諸侯の憩息所も整備されていたという。生業についての詳しい記述はないが、地引船が5艘、小買附船と称する船が6艘、総計13艘の船があり、主な漁獲は鮪、鰹、比目魚（ヒラメ）、鯖などで、特に当地の名産品として鮫鱈（アンコウ）の名が記されている。また、河岸場があり、米、竹木、炭薪などを江戸へ向けて搬送していたとしている。なお、同書によれば戸数は120戸としているが、『二宮町郷土誌』（二宮町教育委員会 1965）では明治10年時には291戸であったという。

さて、二宮町における民俗に関する報告は残念ながら多くはない。教育委員会による文化財調査や町史編纂事業においていくつかの報告がみられるが、特筆すべきものとしては『二宮町歴史研究会だより—古文書—』（二宮町歴史研究会 1978）において漁業史資料からの論考や漁師の信仰についての聞き取り調査報告がある。なお、神奈川県史にも断片的ではあるが民俗事例が報告されているものの、体系的な報告としては『二宮町文化財調査報告書25号 二宮町民俗調査報告書』（二宮町教育委員会 1997）を待たねばならない。ただし、これも民俗全般を網羅しているわけではない。

【註】

- (1) 例えば、既に前掲した『二宮町郷土誌』のほか、『二宮町近代史話』（二宮町教育委員会 1985）、また、二宮町山西在住の松本昇平氏（明治39年生）による随筆的な著書で、『二宮のむかしばなしふるさとの歌』（伊勢治書店 1989）、『二宮のむかしばなし呼子鳥』（同、1989）、『二宮のむかしばなし生活の歳時記』（同、1990）などがある。また、町史編纂にかかわるものでは『二宮町史資料編2近代現代』（二宮町 1992）、『町史研究にのみやの歴史』第2号（二宮町 1990）、『町史研究にのみやの歴史』第3号（二宮町 1991）などにいくつかの報告がみられる。特に『町史研究にのみやの歴史』第2号に掲載されている「二宮町の漁業」は、本稿の話者自身が執筆したもので興味深い。なお、大磯町郷土資料館においても企画展図録として『相模湾の船と船大工』（大磯町郷土資料館 1992）を刊行している。この中で二宮造船所における船大工による造船工程や技術、信仰などを紹介している。
- (2) 『神奈川県史民俗資料調査報告1』（神奈川県 1971）、『神奈川県史 各論編5民俗』（神奈川県 1977）
- (3) 同報告書は、町史編纂事業の一環として平成元年から実施された民俗調査が基本となっている。同書の構成は、第1章社会制度・第2章生産生業・第3章衣食住の伝承・第4章年中行事・第5章人生儀礼となっている。なお、町史の本誌（民俗編）は編集されていない。

話者の履歴と環境

話者は二宮町山西に140年続いている漁家の5代目として昭和9年に生まれている。同家の伝承では、旧姓を松原といい、武士であったが断絶し、小田原千度小路で修業を経て140年前に現在地へ移り住んで漁師となったという。古くからフナモチの専業漁家として、家族のほかにフナカタなど常時10人以上の大家族だったという。なお、専業漁家ではあったが畑を所有したり無くしたり、あるいは借りて作ったりと百姓のマネゴトもしてきたという。

話者は昭和15年に二宮尋常高等小学校に入学している。物心がつく以前から祖父の躰は厳しかった。祖父は、ときおり故事来歴を話すこともあったが、その時はかしまって聞かされたという。家業については、「頭で覚えんじゃねえ、体で覚えんだ」「仕事は盗んで覚えろ」と一切教えず、話者が25歳の時に死んだ父親も同様であったという。しかし、祖父に連れられて行き、長じてからは自分で遊びに行き見聞したことに、後年どれほど助けられたか分からないという。中学校卒業後に家業を継ぎ、現在もなお現役として主に地曳網やワカメ栽培漁などをおこなっている。なお、話者の父親は町議や漁業組合長を勤めている。

ところで、話者は同世代の他の話者に比べて、豊富な民俗伝承を持っている。これは、話者がソウリウウッコ（総領っ子）として祖父にかわいがられたことや、早くから身近な伝承に興味を抱いていたことなどがあげられる。自ら民俗資料の保存活動などに力を入れている一方で、話者としても非常に貴重な存在といえる。そこで、同話者からさまざまなテーマのもとで継続的に話を聞くことを前提として今回の調査をおこなった。ただし、冒頭で述べたように、今回は自らの思い出話として自由に語っていただいたので、まず、最も話しやすい子どもの頃の遊びや動植物の名前などが中心となった。なお、話者の年齢にしたがって、昭和12年前後から戦中（太平洋戦争）にかけての内容が主体となっている。

【註】

- (1) 話者の西山敏夫氏（昭和9年2月22日生）にはたいへんお世話になった。また、本稿の記述内容についても、監修していただいた。記してお礼申し上げます。

子どもの様子

家事や畑仕事などの手伝いは日常茶飯事だった。しかし、子どもにとって、手伝いは同時に遊びでもあった。掃除や雑巾がけ、水汲みはもちろん、女子は子守りを頼まれて駄賃をもらったりしていた。男子は薪割りやクズカキ、モシキ拾いなどをした。クズカキやモシキ拾いには、小さい時分に

はメケエゴ（メカゴ）、大きくなるとシヨイカゴを背負って浜の土手や山へ行った。これは年寄や子どもの役目だった。暑い中でイモのツルツケエシや、ノギが汗で付きチクチクと痛い麦刈り、麦運びなどは特に印象が強い。秋の農繁期には子どもの遊びは少なくなるが、その手伝いのなかに遊びを見つけていた。

「コドモハカゼノコ オトナハヒノコ」のたとえがあったように、雨さえ降っていなければ、どんなに寒くても「外で遊べ」と、子どもはすぐに戸外へ追い出された。頭よりもまず身体が第一で、質実剛健の気風が強く、とにかくたくさん食うことが基本だった。そして、兄や姉などがいれば別だが、ふつうは学校にあがる前に自分の名前が読めて、カタカナで名前を書くことさえできれば上等だった。また、北や南の方位を覚えたのも学校にあがってからで、オウライ（東海道、現国道1号線）をもとにウミッカワ（海側）とヤマッカワ（山側）、ニシとヒガシだけで実際の方位とは少々ずれて認識していた。

学校にあがってから最初に教わったのは、「ヨクマナビ ヨクアソベ」ということだった。しかし、先生に「ヨクアソベ」と言われなくても、年上の者から教わりながら自分たちも考えてよく遊んだ。特に上下のつながりが強かった。だいたい高等科の2年が大将となり、年上の者が下の者の面倒をみた。1年でも先に生まれたことはそれだけで目上であって、リコウやバカに関係なく「大きいものに従う」という漠然とした統率がなされていた。それらはやがて青年団の組織のなかにも生かされ、さらに青年の力の強かった当時の社会では地域のナワバリ意識のようなものにもつがっていたようだという。

遊ぶ時間にも特徴があった。話者の地域（茶屋町）では、1班・2班とそれぞれ男女別に班を構成して登校したが、その待ち合わせの時間が遊ぶ時間でもあった。みんなが集まるので、このときに大がかりな遊びをすることが多かった。熱中しすぎて始業時間に遅れ叱られることもあった。昼休みはもちろんだが、下校時も大切な遊びの時間だった。特に家が遠ければ遠いほどいろいろな遊びをやりながら帰った。

話者は昭和15年に尋常高等小学校に入学しており、その春に紀元二千六百年の祝典があった。その陰で戦争準備のため極端に物資が無くなり、生活が大きく変わったという。それ以降、終戦まで生活物資はシリツボミに少なくなっていた。学校への通学スタイルは、豚革のランドセルに半ズボンの黒い学童服、ズック、アサブラを入れたゾウリブクロを手にはぶら下げて行った。話者は、物心がついたときには洋服を着ていた。学校が休みの日には、まだ着物を着ることはあったが、学校

へ着物を着て来る子は1人もいなかった。先生方も男性は着物はいなかったが、袴姿の女の先生は何人もいた。

戦時中から戦後にかけては、昼は家へ食べに帰る子どもが多かった。なかには家に帰っても、飯を食べてこないこともある。運動場をプラプラしている場合もあるし、ちょっと知恵がまわれれば家の方へ行って食べたようなふりをして戻ってきた。弁当を持って行くこともあったが、その内容はアルマイトの弁当箱の真ん中に梅干しを入れただけの日の丸弁当か、カツプシに醤油をかけたものか海苔を並べたもので、それが飯の間に入っていて2段になっていたらたいへんなものだった。だから、魚の煮つけや塩焼きがオカズに入っていればワーと歓声があがるほどだった。昭和30年代になって「巨人、大鵬、卵焼き」ともてはやされたことがあったが、それ以前に弁当に卵焼きを持ってくるのは、オベッソウのオボッチャンかオデージンの子どものみだけだった。

また、当時の子どもはよくハナを出していた。なぜかいちばんハナを出していたのは、小学3、4年生ぐらいの男子だったという。いちばんすごいハナをゴトツパナと呼んでいた。袖口で拭いていたので、布がテカテカに光っていた。ハナをかむのには、新聞紙や雑誌の紙を使うことが多かったが、チリガミ（ハナガミ）があれば、1回で捨てることなく何度も使った。

川の遊び

春のお彼岸を過ぎる頃になると男子は川で遊ぶようになる。川ではいろいろな遊びを見つけては楽しんだ。例えば川に流れてきたものを見つけると先を争って石を投げて当てたり、河口に近いところでは川の蛇行によってできている崖の縁を歩いて片足で崩し、その崩れ方の大きさを競ったりした。落ちてズブ濡れになると、ドンブラゲとはやされた。

4月も半ばを過ぎれば水もだいぶんぬるむので、川へ魚をすくいに行ったりした。西方町境を流れる押切川（中村川）にはフナ、エビ、ガーバ、ハヤ、ウグイ、ウナギ、カニ、カメなどがいた。ガーバというのはハゼの仲間であるガーバッチョとも呼んだ。たいていタマ（タモ）やオヤザル、ミで水中の大きい石をどかしたり、土手が崩れて木や竹の根が水中にあるその中を棒でつつ突いて追込みすくってとった。川の流れを塞ぎ止めて中の水を掻き出してとる方法もあった。これをケーボリ（カイボリ）と呼んでいた。また、4月ともなれば、アイ（アユ）がのぼった。タマを河口近くの流れの狭いところにパッとかぶせればとれた。このあたりの川は規模が小さいので専業や副業として魚をとることはなく、あくまで子どもの遊びであっ

た。なお、とった川魚を食べたことはない。海の近くだったので食べるのは海の魚だった。

海の遊び

春のお彼岸を過ぎると海へも行くようになる。しかし、まだこの時期は川で遊ぶことの方が多く、特に小さな子どもだけの時は、やはり川で遊んだ。海で遊ぶのは主に夏の水浴びで、下の者から上の者まで多人数で行った。ただし、水浴びをするのは、ほとんどが男子だった。いで立ちはパンツかロクシャク（六尺）で、ジupan、ハンテン、シャツなどを羽織って行った。上半身が裸だとオマワリサンに咎められてしまったという。水浴びをするときは、小さい子は全部脱いだ。

まず、浜道の脇にあった畑のトマト、マクワウリ、キュウリを盗って行き、波の向こう側へホッポリ込んでおいた。次いで、1年、2年の背の低い者から順に、波がウツてくる（砕ける）ところへ向かって頭から飛び込んでいった。まだ泳げない子は多くいたが、アブカ（溺れる）すると上の者がかまえて助けた。アブカして死んでしまった例はなく、これによって泳ぎを覚えたのだという。寒くなると砂浜で腹ばいになって暖まった。この時に、先ほど海に入れておいたトマトやマクワウリを食べた。喉が乾いているのでうまかったが、キュウリだけは塩がないとだめだった。なお、地先の浜で遊ぶ範囲は決まっておき、特別なことがない限り他の地区の浜までは行かなかった。また、お盆のときは海の中からオショロサンが引っ張り込むので泳いではいけないと言われて泳がなかった。

ところで、かつてはカンダチ（夕立）が多かった。カンダチがくると、上着を脱いでまるめて抱えて駆けて帰ったり、軒先へ飛び込んで雨宿りをしたりした。雷が鳴れば「クワバラ クワバラ」と唱えたり、蚊帳を吊ってその中へ入ったりした。また、子どものヘソを取りにくるというので、昼寝のときもハラマキやサラシ、ハラガケ（キンタロサン）をしてヘソをださないように気に掛けた。近年カンダチはほとんどなくなった。

動植物の呼び名と遊び

〈トンボ〉 いちばん大きなトンボをフジと言った。今で言うオニヤンマで、いつも1匹だけで飛んでいた。フジの次に大きなトンボをカンノと言った。今で言うギンヤンマと思われるが、特に雄と雌が繋がって飛んでくるのをカンツルミと言った。カンツルミというのは「カンノがツルんでいる」という意味で、つながり方によってはホカケと呼んだ。2匹を捕ることができればたいへんなものだった。また、黄色っぽいものを、その色からアワといい、水色と黒のやつをコメと言っ

た。コメは今で言うシオカラのことだが、シオカラと呼ぶようになったのは戦時中以降のことだという。お盆近くになって出てくるのがオショロで、オショロの中でも真っ赤なやつが混ざっているものをベニと言った。オショロは今で言うアカトンボのことで、山から下りてきて山へ帰ると言われていた。また、トンボの中でも最も小さなやつをカトンボと言った。

トンボはたくさんおり、最も身近で、且つセミなどと比べるとずっととりやすかった。したがって、普段も「トンボとセミ」と言い、「セミとトンボ」とは言わないのだという。小さなトンボをたくさんとっても自慢にならず、大きなものをとることに励んだ。オウライや、オウライから行く浜道には畑の上にトンボがたくさん飛んでいたの自然と子どもたちも集まった。

トンボは、もっぱらサデ（捕虫網）でとったが、特に釣ってとることをトンボツリと言った。テグスはまだ手に入らなかったの、細い竹竿（オンナダケ＝シノダケ）に木綿糸を結んで釣り針をつけた。エサは家の蠅をとり、釣り針に引っ掛けて飛ばしておいた。浜の蠅はコバエなので使わなかった。トンボは人影を見ると次第に高く上がってしまうので、しゃがめばトンボも下りてくるだろうと思い、しゃがんで待ち伏せていきなり飛び上がってとろうとするが、なかなかとれなかった。その中をフジやカンノがすいすい飛んでいた。なお、オショウロはオウライにはあっちからこっちまでいっぱい飛んでいるが、高くてなかなかとれない。トンボは南北に飛ばずにオウライに沿って東西に飛ぶという。また、夕方、薄暗くなるときの最も多く飛んでいる。遅くまでトンボをとっていると、「バカスケ、いつまでトンボとってんだ。トンボを佃煮にして食うつもりか」と、よく叱られた。

〈センミ〉 今で言うセミのこと。センミには多くの種類があり、その鳴き声から呼び分けており、鳴き声そのまま名前になっていた。ミンミンというのは今のミンミンゼミ、シャーシャーというのは今のクマゼミ、カナカナというのはヒグラシにあたる。いちばん多いのはジージーで今のアブラゼミ。また、ツクツクボーシが鳴き始めたら秋が近づいてきた証拠だった。特にツクツクボーシは、鳴き声が「…カーイーヨー、カーイーヨー」と鳴いてきたら鳴き止む直前となるので、もうとれない。アブラゼミ、ヒグラシなどの名を言うようになるのは、学校に通うようになってからで、理科などで知った。

〈ブンブン〉 現在ではコガネムシなどと呼ぶことが多い。かつてはいくつかの種類に分けて呼んでいた。まず、金色に光っているやつがカナブン、茶褐色のやつはオバアと呼んでいた。これ

はケヤキの木を揺ると落ちてきた。また、つかまえると手が汚れてしまうようなものをクソブンブンといい、畑の大豆にうじゃうじゃいたという。

〈ゴロウ・ジュウロウ〉 今で言うカブトムシのことだが、カブトムシと呼んだことはなかった。一概にゴロウ、ジュウロウと呼んでおり、特に雄をゴロウ（五郎）、雌をジュウロウ（十郎）と呼んだ。これは曾我物語の曾我五郎時致と十郎祐成兄弟の仇討ち伝説にちなんだもので五郎は力持ちであるという伝承から雄をゴロウと呼んだのだろうという。

〈サムライ〉 木の根元の地中にフクロをつくっている蜘蛛のこと。特にマサキと竹の垣根の根元に多かった。フクロを引っぱるとスーと抜けるので、それらを集めてきて蜘蛛を出し、フクロをぐるっと丸にして土俵とした。そのなかで2匹のサムライを勝負させる。負けると腹を切って死ぬので、サムライの呼び名があるのだという。勝っても傷だらけになると、「切腹させんべえ」ということになり、サムライをつまんで折り曲げてやると自分で自分の腹を切った。

〈ホタル〉 かつては珍しくなかった。ホタルをとるには田のあるようなところへ行き、捕まえると蚊帳の中へ放した。灯火管制以降の特に昭和16～18年頃は、夜はいつそう暗くなったのでホタルが目立った。夜、夕涼みにオウライへ出るとホタルが飛んでいたの、よくウチワで追った。

〈チョウチョウ〉 モンシロ、カマクラチョウチョウなどの名を覚えている。カマクラチョウチョウは黒くていちばん大きなチョウチョウだった。飛んでいけば追いかけたが、なかなかとれず、棒でたたいて落としたりした。

〈バッタ、ガチャガチャ、スイッチョ〉 バッタにはクソバッタ、オンメなどと呼ぶものがあった。両足を揃えて持ち、「オンメハタオレ、ハタオレ」とはやして遊んだ。竹や草の茂みのところをボサッカ、またはボサッカブラと言い、そのような場所にはガチャガチャ、スイッチョなどがいた。ガチャガチャは今で言うクツワムシ、スイッチョはキリギリスのことで、やはり鳴き声からの名前。これらを竹カゴに入れて飼い、キュウリやナスを与えて鳴き声を楽しんだ。

〈クビキリ〉 キリギリスをスマートにしたようで、羽を押さえてどこでもいいから噛み付かせ、引っ張ると首がとれてしまうことからの呼び名。思い返してみれば、とても残酷な遊びだったという。

〈チョッチョツ〉 春になると「チョッチョツとりに行くべえ」と言った。チョッチョツというのはホーホケキョと鳴く前のウグイスのこと。

〈ヤマンバト〉 ヤマンバトは「ドテッポー、ドテッポー」という太い声で鳴くのですぐ分かった。

〈メジロ〉 メジロも多かった。秋が深まる11月末になると川勾神社付近や吾妻山の頂へメジロとりに行った。霜が下りてからとったメジロはシモクイといい、死にやすい。メジロを売るには雄の方が高く、雌は半値になってしまった。

〈スズメ〉 スズメは冬にいちばん目についた。木の股とゴムでパチンコを作り、道路の小砂利で当ててとった。

〈ニワトリ〉 ニワトリは農家以外の家では飼っていないので卵は貴重だった。お見舞いへ行くのに、卵10個持って行けば、それだけで十分だった。持って行くときは、お菓子の箱（ボール紙）にモミガラを入れ、その中へ並べて持って行った。

〈カガミッチョ〉 カガミッチョというのは、トカゲの子どもみたいな小さなもののこと。指でさすと、指の先から腐ってしまうと言うので、親指を中に入れてこぶしで指さした。

〈ヘビ〉 ヘビも多かった。アオダイショウはニワトリの卵を狙いにくる。草葎きの家には、ネズミを狙うヘビが住んでいた。ツバメなどの卵をそのまま飲込むと、高いところから自分で落ちた。シマヘビやジモグリはどこでもいた。また、山へ行けばヤマッカガシを見ることができた。ヘビがたくさんいたのは、米や大豆などの穀物を求めてネズミがたくさんいたからだという。戦後、瀬戸物の卵をニワトリ小屋の中に置いておき、それをヘビが飲んで死んでしまったということがあった。ただし、海寄りの子どもたちは、あまりヘビの種類について詳しくはなかった。

〈イヌ〉 イヌを飼っていた家は珍しかったがノライヌは多かった。ノライヌを捕りにくる人がおり、イヌッコロシと呼んでいた。

〈ネコ〉 ノラネコも多かった。ノラネコにとられないように、魚を入れるオケには蓋があり、これをヨウバチと呼んでいた。

〈その他〉 このほかにムカデやイモリもいた。ただしイモリは年寄はいたというが、自分は見ることがない。植物ではウズランメ（ユスラウメ）やグミ、ナツメ、スイカンボ（イタドリ）、ニッキなどが食用になった。グミは渋かった。ナツメは台風が通過すると落ちるので拾って食べた。木になっているうちはまずく、黄色くなったものもいい。スイカンボはなるべく根元の太いクキの部分を食べた。塩を付けなければ食べられなかったの、紙に塩を包んで持っていった。ニッキは祭りなどで買った。生のままではだめなので、根を掘ると干してからしゃぶった。また、ヘビイチゴはヘビが食うとって食べたことはない。なお、アオウメは、食べたなら死ぬと言われ、その時季になると親や先生から厳重に注意された。アオウメを食べて実際に死んだ子もいたという。

さまざまな遊び

〈カクレカンジョウ〉 秋になるとよくやった。やっていると夢中になってしまう。秋の日暮れはツルベオトシで「すぐ暗くなっちゃうからよせ」と、よく言われた。天狗さんにさらわれちゃうとも言った。「やれ、どこの村のだれそれは天狗に……」という言い方をした。その後「人さらいにさらわれてサーカスに売られちゃう」と言うようになった。「神隠し」という言い方はしなかった。

〈コマ〉 暮れから正月にかけてはコマ回しが盛んになった。コマの回し方には男回しと女回しがあった。斜め上や横から投げるのが男回しで、手前から向こうへほうり投げるのが女回しだった。勝負の仕方は、まず女回しで一斉に回した。回らないコマはビリッコマといった。いちばん寿命の長い（長く回っている）ものがテンカとなる。その前がテンカシタとなり、いちばん寿命が短かった者がビリとなる。次にビリがいちばん最初に回し、次はビリのコマにおつけるように回していく。コマは鉄コマだったので、ぶつけたときカネワにあたるのをカネワ、その下にあたるのをゴック、上に当たるのをノートーと言った。ゴックはうまく当たると相手はふっ飛んで消されてしまう。カネワの場合は、下の者が2つのコマを紐で囲い、両手でガチンと当てると上になれた。「ノートッコマは消しなせ」といい、やられた方のコマは問答無用で消した。なお、テンカのコマがテンカシタのコマよりも早く終わってしまえばテンカは入れ替わった。また、テンカでもコマが回らなければビリッコマなのでビリとなった。寿命を延ばすために、コマを回す麻紐ではたとえフサが切れてどんどん少なくなるので、ゲタやゾウリではたいた。

〈カルタ、スゴロク〉 とともに正月に遊ぶことが多かった。カルタはイロハカルタで、戦中は兵隊ものが多かった。

〈竹馬〉 正月にやることが多い。足をのせるところは竹の節を利用し、割ったマキ2本で竹を挟んで前後を針金で縛った。足が地についているような低い竹馬はゾウリと言った。節で数えて1段・2段といい、高いのに乗って得意になった。また、片方を肩に担いで片足で飛ぶのをテッポウと言い、「テッポカツイダ ハイタイサン……」と歌いながらやったが、いちばんむずかしかった。

〈氷〉 冬の朝は氷がオモチャだった。氷をとってきて割ったり投げたりした。赤くなって痛い指先をかがめ、一生懸命に息を吹きかけて暖めたが、シモヤケやアカギレがよくできた。

〈ウマノリ〉 男子が冬場にいちばんやった遊び。オウライを横切ってやった。2組に分かれ、電柱を利用して小さい者が立ち次々に前の者の股に首を突っ込んで馬になる。乗り手は反対側の家の前から助走して飛ぶ。馬が10数えるうちにつぶれた

り、全員が乗り終わらないうちにつぶれたら、もう1回馬をやらなければならなかった。そこで、いろいろな作戦をたてながらやった。このウマノリは、朝、学校へ行くために全員が集まるので、その時にやるが多かった。

〈オシクラマンジュウ〉 これも冬の遊び。地べたに輪を書き、その中に外を向きながら尻と背中を押す。そこからはみ出すと負けになった。「オシクラマンジュウ、オサレテナクナ」と繰り返して言いながら押した。寒中でも小汗をかいた。

〈テンツキ運動〉 シャがんだ姿勢から、天を突くように大きく伸び上がるしぐさを繰り返す。戦争が激しくなるにつれ、寒いというと学校で先生がよくやらせた。

〈石ケッチン〉 今で言う石ケリのこと。主に冬にやった。

〈ブツケ〉 メンコのこと。絵柄は、戦前には八幡太郎義家や楠正成が多く、大きなものほど偉い武将が描かれていた。戦時中は軍人の絵柄が多くなった。なお、いずれも丸型が主流だった。買ってくると、菓子折りなどのボール紙を裏へ何枚も重ねた。こうすると重たいので負けなかった。

〈カッチン玉〉 ビー玉のこと。なお、石ケッチンでは石を取られることはないが、ブツケとカッチン玉は真剣勝負なので負けたら取られた。

〈兵隊ごっこ戦争ごっこ〉 兵隊ごっこというのは幼年の子どもたちがやるもので、チャンバラだった。年齢が上になると戦争ごっこになった。戦争ごっこは、4月3日のオセックに遊ぶもので、二手に分かれて山と浜の土手に陣取り、合戦をした。学年によって階級がつき、少尉になると8番線の針金でサーベルを作り、畑へ数え切れぬほど突き刺して光らせておいた。太い青竹に水とカーバイトを入れ、マッチで根元の小さな穴に火をつけて大砲と称した。

〈勲章ごっこ〉 王冠はめつたになかったが、ビールやサイダーの王冠が手に入ると胸につけて遊んだ。

〈タンク〉 昭和9年に拡幅と新道が完成し、真ん中だけコンクリートで舗装されたオウライを演習の行き帰りのタンク（戦車）が時折通った。ガラガラという勇ましい音が風に乗って遠くから聞こえてくるので、外へ飛び出して手を振った。敬礼をすると天蓋をあけて顔を出している兵隊さんが敬礼をしてくれた。

〈アタマサワリ〉 クビに手を当てられたら負け。二手に分かれて頭を触られたら死に、最後にどちらが生き残るかで勝ち負けが決まった。明治39年生まれの親父はクビキリという名で呼んでいたが、大正末期頃からクビからアタマになったといい、どちらもふつう左手で防ぎ、右手で攻め、1人生き残った方が勝ちとなり、何回もやった。

〈デンシンオニ〉 主に学校の帰りに同級生で遊

んだ。道路を横断しながら電柱から電柱へと渡っていく。電柱に触ってればオニにつかまらないが、離れたときに体を触られるとオニになる。

〈ナワトビ〉 藁の縄を使って大勢でやった。オオナミコナミとか、回し手が「オジョウサン、オハインナサイ」と歌うとすかさず「ハーイ」といながら入ったり、電信柱に触って戻ってくるなどのルールがあった。どちらかと言うと女子の遊びだが、女子のやっているところへ男子がいたずら心で飛びに入ったりすることもあった。ただし、「電信柱に触って戻ってくる」のは主に男子で、自動車がたまにしか通らないオウライで盛んにやった。いずれも、つかえると交代して縄の回し手となった。

〈ゴムトビ〉 女子の遊びだが、小さい頃には男子も混ざってやった。一段、二段と上げていき、失敗すると交代となった。

〈オママゴト〉 寒いときは、じっとしている遊びはやらない。春になって暖かくなり草花が芽を出すと、タンポポなどの野草や、秋口には野菊などの花をとってきて遊んだ。地ベタに線を引いてそこに座ったり、大人の目をごまかしてゴザを持ち出して座った。女子の遊びだが、小さい頃はお父さん役などで男子も入った。学校へ上がると「オトコとオンナがマンメンチ」とはやされ、男子は軽蔑された。

〈オテダマ〉 女子の遊び。「オヒトツ、オヒトツ、オヒトツのオサーライ」と歌いながらおこなう。手遊びとしてはアヤトリも盛んだった。

〈セッセッセ〉 女子の手遊び。歌は「夏も近づく八十八夜……」、ヒロセ中佐の「トドロクツツオト……」が主だった。

〈マリツキ〉 マリツキの歌のうち「あんたがたどこさ……」は戦後に盛んになった。それ以前は「イチレッダンパンハレツシテ ニチロセンソウ……」と歌っていた。

〈その他〉 オウライで、「モロコシモロコシアノコガホシイ コノコガホシイ」と二手に分かれて歌いながら、前に出たり退ったりして遊んだ。また、「カゴメカゴメ」、「トオリヤンセ トオリヤンセ」などや「ぬり絵」、「着せ替え」などのほかに、行事やお祭りに行くことも楽しみのひとつだった。話者は、昔の子どもは遊びの天才であったといい、さまざまな物を使って野山や原っぱを駆け回り、手足が傷だらけになると、衣服が破けても、さらに川や海でドンブラゲ（ずぶ濡れ）になっても懲りずによく遊んだという。

まとめにかえて

今回の調査で気づいた点をいくつかまとめておきたい。まず1点めは、遊びに季節感が感じられることであろう。本報告では遊びの種類を把握し

やすくするために季節ごとに区分する方法はとらなかったが、遊びの記憶が季節の情景とともに思い出される傾向があった。ただし、現在の子どもの遊びに季節感がないという訳ではなくもちろん一部では当時と変わらぬ遊びが生き続けていることもあるに違いない。もっとも、現在の子どもの遊びを精査している訳ではないため、単にノスタルジックに述べることは避けたいと思うが、大局的にみれば確実に季節感が薄れつつあることも事実だろう。まして、話者のように正月や盆、彼岸、四大節、あるいは地域の祭礼などの行事と絡み合わせて語られるような遊びの要素とはかなり違ってきていることがうかがえる。ここでは、ひとりひとりのもつ遊びのレパートリー、あるいは集団での遊びの内容やそれにかかわる規律などを比較する材料は持ち合わせてはいないが、それらは質的に大きく変わってきているであろうことが想像される。

2点めは、動植物の俚称をしっかりと把握する必要性を感じたことである。ある意味では当然の課題ではあるが、俚称と現在の一般的呼称（あるいは標準名）とを照会しながらの調査は意外と手間のかかる作業である。近年、拙館や近在の博物館などで「セミの脱け殻調査」がおこなわれている。これは、脱け殻の種類や個体数を調べることにより、環境指標とも成り得るセミの生息分布を把握しようとしたものである。このうち、南方系の種であるクマゼミについての発生状況を知るため、調査員は脱け殻の採集に加えて、過去の情報を得るために年配者に聞き取りをおこなうこともあったようである。ところが、調査を受けた話者がクマゼミの名称を知らなかったため、調査員の質問内容に対応できなかったという話がある。このように、話者と調査員との世代差のため名称を共有できないことによる弊害例も出ている。もちろん、これは民俗調査の際にも大いに参考になる教訓といえよう。

さて、3点めは話者自身が「昭和15年」という年代をひとつのターニングポイントとして認識していることである。確かに昭和20年の戦争終結を機に、体制的に大きな転機を迎えたことは事実であるが、日常の暮らしぶりにおいては、物資の統制を受けて配給制が敷かれるようになった時期こそ大きな転機であったとのことである。そして、話者が尋常高等小学校に入学した記憶と相俟って昭和15年が印象的に語られている。今後、同話者からさまざまなテーマにおいて継続して聞き取りをおこなっていく中で、昭和15年という時期を十分留意しながら調査していきたいと考えている。

(当館学芸員)